

基礎・教養科目のための

社会人基礎力向上を目指した情報教育プログラムの開発

勝瀬 郁代^{*1}

^{*1} 近畿大学 産業理工学部 情報学科

Information literacy instruction program to improve basic ability to work in society for basic and liberal arts

Ikuyo Masuda-Katsuse^{*1}

^{*1} Kindai University

本稿では、地域社会の課題を発見し、情報通信技術を活用して解決するための事業提案を行う活動を通して、社会人基礎力の涵養を目指す教育プログラムについて報告する。このプログラムでは、まず情報通信技術を活用して地域の課題を解決した事例について研究し、地域社会が抱える問題を認識し理解すること、問題解決のための人的・組織的ネットワークの必要性に気づくこと、地域課題の解決に利活用できる情報技術・情報システムの基礎知識を得ることを目指す。その後、チーム活動を通じて自ら地域社会の課題を見出し、解決のための事業を提案する事業提案協働活動により、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）へと転換する。プログラム終了時に実施した受講生による主観評価の結果、本科目の履修により社会人基礎力は概ね向上したと感じていることがわかった。

キーワード：教育プログラム，社会人基礎力，ICT活用，地域活性化，アクティブラーニング

1. はじめに

情報通信技術や人工知能の急速な発展により、我々の社会は今まさに、第4次産業革命ともいべき大きな変革を経て、Society 5.0と呼ばれる社会へと変わろうとしている⁽¹⁾。新しい社会では、これまでの社会とは、産業構造・雇用市場・就業構造が大きく変わり、求められる人材もこれまでとは異なる。従来型の社会では、「業務遂行能力」や「基礎的素養」を有する人物が重宝されたが、これらは人工知能が得意とする能力でもある。そのため、人工知能と協働することになるこれからの社会では、より「チャレンジ精神，主体性」，「行動力，洞察力」，「企画発想力や創造性」といった能力を有する人材が求められる⁽²⁾。

経済産業省は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として、2006年に「社会人基礎力」を提唱した⁽³⁾。社会人基礎力は、「前に踏み出す力」，「考え抜く力」，「チームで働く力」の3つ

の能力から構成され、さらにこれらの能力は12の要素から構成されている。社会人基礎力の項目を表1に記す。

平成21年に経済産業省が報告した「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査」によると、企業側は学生に対し、「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション力」といった内面的な基本能力の不足を感じているのに対し、学生は、技術・スキル系の能力要素が自らに不足していると考えており、企業側が「学生に求める能力要素」と学生が「企業から求められていると考えている能力要素」ならびにその水準には、大きなギャップが存在している⁽⁴⁾。社会から求められるこのような能力を涵養するために、高等教育機関である大学も、教育方法の見直しを求められてきた。アクティブラーニング導入の推奨もその一つである。社会人基礎力は、専門知識やスキルを活用する上でも必須であり、就職後だけでなく、大学での学びの充実にも大きく貢献すると考えられる。それゆえ、主に低学年で開講されている基礎・教養科目は、そのような基礎能力の涵養

表 1 社会人基礎力

A 前に踏 み出す 力	A1 主体性 (物事に進んで取り組む力)
	A2 働きかけ力 (他人に働きかけ巻き込む力)
	A3 実行力 (目的を設定し確実に実行する力)
B 考え抜 く力	B1 課題発見力 (現状を分析し目的や課題を明らかにする力)
	B2 計画力 (課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力)
	B3 創造力 (新しい価値を生み出す力)
C チーム で働く 力	C1 発信力 (自分の意見をわかりやすく伝える力)
	C2 傾聴力 (相手の意見を丁寧に聴く力)
	C3 柔軟性 (意見の違いや立場の違いを理解する力)
	C4 状況把握力 (自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)
	C5 規律性 (社会のルールや人との約束を守る力)
	C6 ストレスコントロール (ストレスの発生源に対応する力)

も一つの役割として求められることになる。

一方、地域社会における情報化の流れを見ると、1980年代から盛んに地域情報化政策が実施されてきた。特に総務省は、地域経済や地域社会を活性化させ、地域のさまざまな課題を地域が対応するために、情報通信技術（ICT）の効果的な利活用を推進してきた⁵⁾。

そして現在、我々が目指す Society5.0 の実現には、IoT、ビッグデータ、人工知能、ロボットといった第4次産業革命技術の社会実装がカギとなっている。そしてこのような社会実装は、産業分野を横断して実現されるものである⁶⁾。そのため、情報通信技術を社会がどう利用し、どのように課題を解決するのかについて社会で共有するために、一般教育としての情報教育の拡充はますますその重要性が増している⁷⁾。大学教育においては、情報技術に関する知識や技能を涵養するだけでなく、それらを社会的課題の解決のために ICT を活用できる能力を涵養することは意義があるといえよう。

そんな折、近畿大学産業理工学部では、基礎・教養科目として、情報リテラシー教育と Microsoft Office のスキルを学ぶ情報処理 I・II、IT パスポート試験の領域を中心に一般情報教育⁸⁾を実践する情報処理 III に加えて、2016 年度、「地域社会と情報」が新規に開講された。近畿大学産業理工学部は、文系の1学科と理系の4学科からなる文理融合学部であり、この科目は、その学部 1, 2

年生を対象とした選択・必修科目である。

本論文では、この基礎・教養科目「地域社会と情報」の教育プログラムとして、自ら地域社会の課題を見出し、ICT により解決する事業を提案する活動を通じて、社会人基礎力を涵養するプログラムを開発し、実践した結果を報告する。

2. 授業の到達目標と授業計画

2.1 授業の到達目標

授業の到達目標は、受講生が具体的な目的を意識できるよう、また、達成度を成績評価に反映できるよう、次の4項目を設定した。

到達目標（1）：地域社会が抱える問題を認識でき、その問題の本質を正しく理解できる。

到達目標（2）：問題解決のための、人的・組織的ネットワークの必要性に気づくことができる。

到達目標（3）：地域課題の解決に利活用できる情報技術・情報システムの基礎知識がある。

到達目標（4）：共通した問題解決へ向けて、協働して取り組むことができる。

2.2 授業計画

授業の活動内容は、「地域社会の問題を認識し、情報技術を活用してその解決をはかる」ことであるが、受講生がこれを最初から実践することは難しい。総務省は、各自治体が地域活性化のために ICT を活用して実践した事業の実践報告を閲覧できるポータルサイトを運用しており⁹⁾、これら実践報告はまさに活きた教材として活用できる。そこで、第一段階として、

- ・活動1（事例研究）：「総務省の ICT 地域活性化ポータルの実践報告を教材として、ICT を活用して地域社会の課題を解決する事例を学ぶ」

段階を設け、まずは地域社会の問題に目を向けさせ、それらの問題を解決するための方法や技術を学んでもらった。そして、次に、

- ・活動2（事業提案）：「自ら地域社会の課題を見出し、ICT により解決する事業を提案する」

段階へ発展させ、活動1による学びを課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）へと転換した。

同様に、協働活動についても、いきなりグループワークを取り入れるのではなく、まずは、活動1の中にペア

ワークを取り入れ、少しずつ他者とのコミュニケーション活動に慣れておき、活動2の段階でグループワークを採用した。

このように、授業の到達目標の段階的な達成を図った。また、これらの達成度合いは、小テストの点数といった客観的な点数では測りにくいので、毎授業の終わりに、受講生が「振り返りシート」(2.2.3 参照)に記入することで自らの達成度合いを意識してもらった。

全15週の授業計画を表2に示す。

表2 授業計画

授業週	テーマ	具体的内容
1	導入講義	到達目標とその意図、授業の進め方と成績評価方法の説明
2	事例研究	事例研究協働活動の進め方の説明と試行
3～6	協働活動	予習シートの提出・協働活動による提案シートの作成と提出
7	事例紹介	地域の問題解決事例紹介及び利活用しやすい情報技術の紹介
8～9		解決すべき課題の洗い出し
10～11	事業提案	解決方法の具体化
12～13	協働活動	事業提案書の作成とプレゼンテーションの準備
14～15		事業提案発表と教員による総括

2.2.1 事例研究協働活動(第2回～第7回)

前半で実施する事例研究協働活動では、総務省 ICT 地域活性化大賞⁶⁾を受賞した具体的な事例から、課題設定、課題解決のための人的・組織的ネットワークの構築、情報通信技術の利用方法、効果の検証方法などを学ぶ。さらに、ペアワークで、その事業を発展させる方法を考える。研究対象事例として、総務省ホームページ⁶⁾から、情報システムがあまり複雑でなく、解決すべき課題が学生にも身近で理解しやすいと思われる事業例をピックアップし、4週にわたり、一つずつ研究対象とした。なお、具体的にどのような活動すればよいのか戸惑うことがないように、最初の週(第2回)では、活動内容とその意図について逐一説明しながら一通り体験してもらった。具体的な活動内容は以下の通りである。

(1) 予習課題:「予習シート」の作成

前週に、総務省ホームページ⁶⁾からダウンロードした概要資料と、「予習シート」を配布した。予習シートには、研究対象となっている事業の「解決すべき課題」「解決手段・仕組み」「事業の特徴」「得られた効果」「あなたの意見」などの記入欄を設けてあり、翌週の授業時に提出を求めた。「解決すべき課題」を明確にすることによって到達目標(1)を、「解決手段・仕組み」を明確にすることによって到達目標(2)(3)の学修を促す。さらに、予習シートを作成するにあたり、配布された概要資料だけ

でなく、インターネットでこの事業について検索をして調査することや、不明な用語や情報技術について主体的に調査をするように指導した。

授業では、はじめに、教員がこの予習シートの各項目について簡単に解説した。予習シートの提出を授業終了時として、この解説に基づいてシートの記載内容を追記・修正することを許した。

(2) 事例研究協働活動:「提案シート」の作成

授業の大半は、事例研究協働活動の実施である。この活動は、主体的な課題設定や解決策の提案を促すとともに、ペアワークにより初対面の相手との協働活動に慣れることを目的としている。二名一組となって、対象事例と「同様の情報システムで新たな課題の解決を提案する」もしくは、対象事例の「残された課題を解決するために、追加できそうな新しい機能や仕組みを提案する」活動を行う。提案シートには、「解決できそうな課題」「解決手段・仕組み(図示推奨)」「さらに残る課題」等の項目が設定してあり、二人でこれらの項目について話し合う。社会人基礎力Cにおける“協働する他者”には、異分野の他者が想定されていることから、協働ペアを組む相手はできるだけ異なる学年や学科の相手と組むよう、また、毎週異なる相手と組むように調整した。加えて、授業時間中であっても、疑問に感じたことはスマートフォンなどを使って調査することも奨励した。一組で一枚の提案シートを作成し、授業終了時に提出してもらった。

(3) 提出シートのフィードバック

「予習シート」と授業で作成した「提案シート」は、評定(S,A,B)と、改善すべき点や優れている点などを指摘したコメントを記入の上、翌週に返却した。

(4) その他の事例・情報技術の紹介(第7週)

4週にわたる事例研究協働活動により、課題設定、課題解決のための人的・組織的ネットワークの構築、ICTの利用方法、効果の検証方法などを学んでもらったが、後半に実施する事業提案活動につなげるためには、より多くの事例や情報技術の知識が必要であるため、この週は唯一の座学形式をとり、時間の許す限り、様々な事業の例を紹介し、情報技術の解説を行った

2.2.2 事業提案協働活動(第8回～第15回)

四名一組のチーム活動により、ICTを活用して地域の課題を解決するための新たな事業提案を行う。チームのメンバー構成は、学科と学年ができるだけ偏らないよう、また、前半の成績を参考に、メンバーの成績も偏らない

ように配慮した。チームごとに、解決すべき地域の課題を設定し、その解決方法を考える。その結果を事業提案書にまとめ、全員の前でプレゼンテーションを行うのが一連の活動である。事業提案書には、「事業分野」「事業タイトル」「解決すべき課題と事業による効果」「事業や提供サービスの概要とシステム構成図」「使用する情報技術」「今後の展望」の各項目を設定し、これらの項目について考案し、記載することを求めた。

この活動は、電算機センターの演習室内で実施し、インターネットを使った関連事項の調査、エクセルを使った事業提案書の作成、パワーポイントを使ったプレゼンテーションの作成を求めた。

事業提案活動は全部で8週を割り当て、「課題の洗い出し」と「解決方法の提案」については、それぞれおおよそ2週ずつをかけて活動を進めるように促した。教員はファシリテータとして各チームの議論に加わって回ったが、授業時間中に全チームを回することは難しいので、課題の洗い出しと解決方法提案のための4週間については、途中経過を記載した提案書を授業終了時に提出させ、それにコメントを記入して翌週に返却し、かつ、翌週に教員が議論に加わるべきチームの優先順位を見定めた。

プレゼンテーションは最後の2週にわたって実施した。各チーム5分以内で、全受講生を前に、チームのメンバー全員が分担しての発表を課した。また、傾聴を促すため、全受講生に対して、他チームの事業提案と発表に対する評価とコメントの記入というピアレビューを取り入れた。

2.2.3 振り返りシートの活用

毎回の授業の終わりに、「振り返りシート」⁹⁾を使って各自で授業の取り組みについての振り返りを行ってもらった。振り返りシートの質問項目は、その週の取り組み内容によって少しずつ異なるが、おおよそ、「読解力」「批判的思考力」「主体性」「傾聴力・柔軟性」「伝える力」「創造的思考力」「表現力」などの項目について自己評価してもらった。また、「自由記述欄」を設けており、授業に対する意見を自由に記載できるようにした。このシートは授業の終了時に提出してもらった。自由記述欄に記載があった場合は、必要に応じて翌週に回答を返した。

3. 受講生による主観的評価

本科目の成績評価基準は、予習課題 20%、事例研究協働活動報告書 20%、事業提案書 40%、プレゼンテーシ

ン 20%である。これらの評価には、授業の到達目標の到達度は複合的に反映されるが、個々の目標の達成度を直接的に知ることは難しい。そこで、授業最終回に、授業全体の振り返りシートに回答してもらい、到達目標の到達度を主観的に評価してもらおうと共に、授業の取り組み姿勢や、社会人基礎力の向上についても、主観的に評価してもらった。この最終振り返りシートの質問項目を付録に掲載する。本科目の履修登録者数は 87 名であったが、授業最終回に出席し、かつ、最終振り返りアンケートの全項目に回答した学生数は 68 名であった。

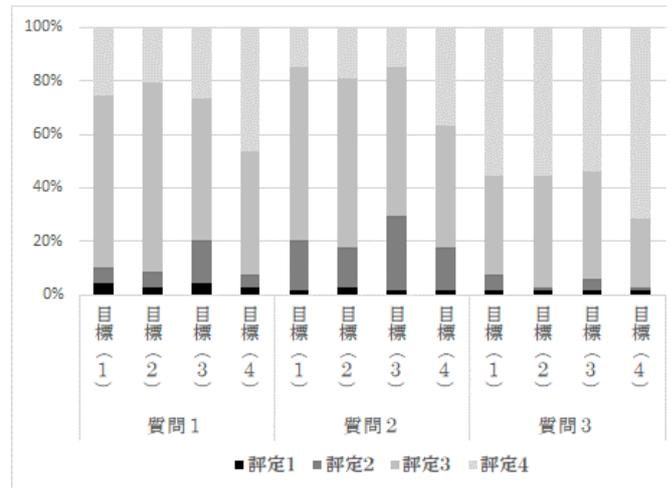


図1 授業到達目標に関する振り返り結果 (質問1: この到達目標を意識して授業に取り組んだか。質問2: 到達目標に対する達成度。質問3: 大学での学びや仕事において、この目標はどれだけ重要か)

3.1 主な質問項目の集計結果

図1は、授業到達目標に対する質問への回答の集計結果である。

質問1は、各到達目標に対して「この到達目標を意識して授業に取り組んでいましたか?」という問いであり、評価1は「この目標を知らなかった」、評価2は「この目標を知っていたが、意識していなかった」、評価3は「この目標を時々意識していた」、評価4は「この目標を常に意識した」である。ほぼ毎回の授業で協働活動を行うので、目標(4)を意識している受講生が多いのに対し、目標(3)はあまり意識されていなかったようである。

質問2は、各到達目標に対して「この到達目標に対するあなたの達成度はどれくらいですか?」という問いであり、評価1は「まったく達成していない」、評価2は「あまり達成していない」、評価3は「やや達成した」、評価4は「十分に達成した」である。到達目標としてよく意識されていた目標(4)は達成度も高い傾向にある

が、目標（3）は、受講生の約3割があまり達成していないと感じているようである。

質問3は、各到達目標に対して「あなたの大学での学びや、社会に出てからの仕事において、この目標はどれだけ重要だと思いますか？」という問いであり、評定1は「まったく重要でない」、評定2は「あまり重要でない」、評定3は「やや重要である」、評定4は「非常に重要である」である。おおよそその受講生が、本科目の到達目標が学生自身にとって重要であると認識していることがわかる。

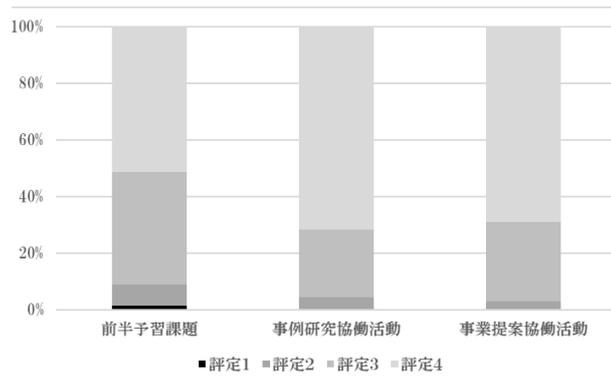


図2 授業への取り組み姿勢に関する振り返り結果

図2は、前半予習課題、事例研究協働活動、事業提案協働活動それぞれの取り組み姿勢に関する質問の回答をプロットしたものである。評定1は「まったく真剣に取り組まなかった」、評定2は「あまり真剣に取り組まなかった」、評定3は「時々真剣に取り組んだ」、評定4は「いつも真剣に取り組んだ」である。予習課題に対しては、いつも真剣に取り組んでいたと回答した学生は半数程度であったが、授業中の協働活動にはより真剣に取り組む姿勢がみられる。

図3は、この授業を受講する前後でどれくらい社会人基礎力が向上したかを自己評価した結果である。評定1は「大きく後退した」、評定2は「少し後退した」、評定

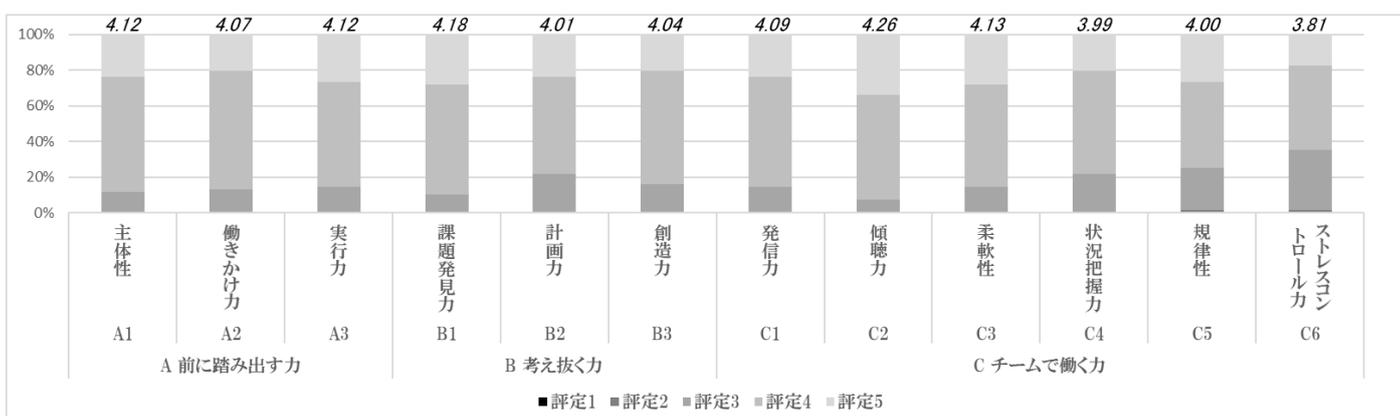


図3 社会人基礎力向上に関する振り返り結果（評定1「大きく後退した」—評定5「大きく成長した」）

3は「変わらない」、評定4は「少し成長した」、評定5は「大きく成長した」である。これらの評定は順序尺度ではあるが、間隔尺度とみなして評定値の平均を計算した結果も図中に示す。評定が最も高いのは「C2：傾聴力」である。コミュニケーションには、自分が話すことだけでなく相手の話を聞く力も必要であることを学んでくれたとすべうれしい。「B1：課題発見力」も比較的評定が高い。地域社会にはどのような課題があるのかを真剣に検討してくれたのだと思う。最も評定が低く、かつ、「変わらない」の評定が最も多いものが「C6：ストレスコントロール力」であったが、それでも約65%の人が向上したと回答していることがわかる

3.2 アンケート項目間の関係

アンケート調査項目間の関係を調査するために、以下の各項目についてグッドマン・クラスカルの順序連関係数 (γ)⁽¹⁰⁾を求め、考察を行った。 γ の値は項目間の相関の強さを示す ($|\gamma| \leq 0.2$: ほとんど相関なし, $0.2 < |\gamma| \leq 0.4$: 弱い相関あり, $0.4 < |\gamma| \leq 0.7$: 比較的強い相関あり, $0.7 < |\gamma|$: 強い相関あり)。

3.2.1 授業の取り組み姿勢と到達目標の主観的な達成度の関係

図4は、授業の到達目標の達成度と、予習課題、事例研究協働活動、事業提案協働活動の取り組み姿勢との相関、および、振り返りシートの活用との相関を示す。グラフより、到達目標（1）や（3）と予習課題の取り組み姿勢には比較的強い相関があることがわかる。予習課題を遂行する中で、どれだけ真剣に、地域の課題を理解しようとし、利活用されている情報技術について調査したかどうかが、到達目標の達成度に関係していると思われる。

次に、前半の事例研究協働活動の取り組み姿勢については、到達目標（3）や（4）と比較的強い相関があることがわかる。学修した情報システムの応用・展開を考えるにあたって、情報システムの構成の見直しが必要になることがあり、これが、情報システムの基礎的な知識の向上につながったと思われる。また、ペアワークでの作業のため、目標（4）との相関が強く出たと思われる。

次に、後半の事業提案協働活動の取り組み姿勢については、すべての目標に対して比較的強い相関もしくは強い相関がみられる。この活動は、すべての到達目標の内容を網羅しており、努力の度合いが達成度に反映されているようである。特に目標（4）とは強い相関がみられ、協働活動への取り組み姿勢が達成度に強く反映されているようである。

振り返りシートの活用度については、目標（2）や（4）の達成度にやや強い相関があることがわかる。

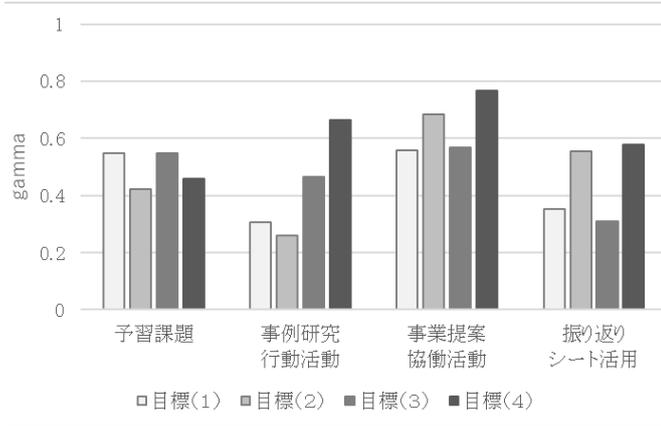


図 4 授業到達目標達成度と授業の取り組み姿勢の相関

3.2.2 達成目標の主観的な達成度と社会人基礎力の主観的向上度の関係

図 5 は、授業の到達目標の達成度と社会人基礎力向上度の相関を示す。到達目標（1）と課題発見力や計画力、規律性に比較的強い相関がみられる。到達目標（2）の達成度は、課題発見力に強い相関がみられる。さらに、前に踏み出す力全体に、比較的強い相関がみられる。「問題解決のための、人的・組織的ネットワークの必要性に気づくことができる」ためには、「課題を認識し理解する」よりも深い洞察が必要である。そのことが「前に踏み出す力」との関係に表れているかもしれない。

到達目標（3）の達成度は、課題発見力とは強い相関がみられるが、ほとんどの社会人基礎力の向上とやや強い相関がみられる。「地域課題の解決に利活用できる情報技術・情報システムの基礎知識がある」ことは、目標（1）や（2）の達成が前提となっており、もともと情報技術

に詳しくないほとんどの履修生にとって、ハードルが高い目標である。それゆえ、この目標の達成が、より広範囲の社会人基礎力の向上につながったと推察される。

到達目標（4）は「チームで働く力」と同じ能力のほずであるが、相関は比較的弱い。むしろ、課題発見力や計画力にやや強い相関がみられる。

4 つの目標に共通して「規律性」とのやや強い相関がみられる。特に後半の事業提案協働活動ではグループメンバーが固定であるため、遅刻や欠席は他のメンバーに多大な迷惑をかけ、活動の停滞につながる。それゆえ、熱心に取り組む学生ほど出席に対する意識が高くなり、それが規律性として意識されたためではないかと思う。

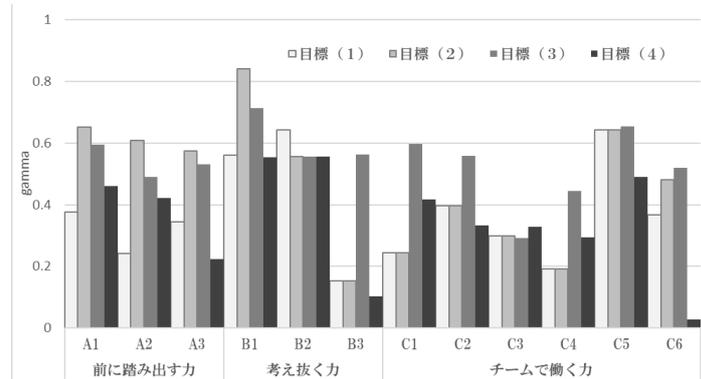


図 5 授業到達目標達成度と社会人基礎力向上度の相関

4. 考察

4.1 予習課題における ICT 機器活用

事例研究協働活動では、取り扱う事例に関する予習課題を出題した。予習課題では、与えられた事業報告書を読み、必要に応じて関連資料を調査し、その事業における「解決すべき課題」「解決手段・仕組み」「事業の特徴」「得られた効果」を読み取り、「自分の意見」とともに、レポートとしてまとめるものであった。時には、問題解決のための人的・組織的ネットワークや、情報システムの構成を自分なりにまとめて図示する必要があった。

本科目が開講した当初は、この予習課題をエクセルシートに記入してもらい、それを、ユニバーサルパスポートを通じて授業前に電子的に提出してもらい、教員コメント欄にフィードバックコメントを記載していた。しかし、提出された課題は、web サイトや事業報告書の文章を丸々コピーペーストしただけのレポートが散見され、教員からのフィードバックコメントもほとんど参照されていないようであった。そこで、現在のように、用紙に手書きで記入させ、その用紙に評価とフィードバックコメントを赤ペンで記入して翌授業で返却する形式に変更

した。その結果、予習課題には、その事業で活用された人的・組織的ネットワークや情報システムの構成が、構成図とともに説明されるようになり、より理解が深まった様子が確認され、用紙返却時にはフィードバックコメントを参照してもらえるようになった。

反転授業におけるICTを利活用した予習の効果を示す報告⁽⁴¹⁾はあるが、本プログラムにおける予習課題のように、解答が一意でない予習課題にICTを活用する場合は、入力デバイスに受講生の表現の自由度がどの程度保証されているかなども教育効果に関係するようと思われる。

4.2 協働活動が停滞する原因と対処

事業提案協働活動では、多くのグループで途中行き詰まりがみられた。行き詰まりの原因は、グループ内のコミュニケーションの停滞よりも、地域の問題を漠然としてしか捉えておらず具体的な解決策を見つけられないことが多いように感じた。前半の「事例研究協働活動」において地域の課題の本質を捉える能力が十分に涵養されていることが、後半の協働活動成功の鍵となっていたように思う。

議論が停滞している時、教員がファシリテータとして議論に加わることで、具体的な解決策を見つけられることが多かったが、授業時間内に教員が議論に加わるグループ数は限られ、とても手が回らなかった。例えば、グループ間で情報交換を行う時間を設けるなどして、受講生同士が互いにファシリテータ役を担うなど、工夫が必要であろう。

5. おわりに

基礎・教養科目として開講した「地域社会と情報」のために、自ら地域社会の課題を見出し、ICTにより解決する事業を提案する活動を通じて、社会人基礎力を涵養するプログラムを開発し、実践した。最終振り返りアンケートの結果、授業到達目標への主観的達成度、社会人基礎力の向上の主観評価とも、おおむね高い評価を得ることができた。自由記述欄にも、「コミュニケーション力が向上した」という記載がいくつか見られた。一方で、授業到達目標に関する質問の回答集計を見てもわかるように、学生は、目標(4)の協働活動する力に意識が向きがちである。目標(1)(2)(3)にもっと意識を向けさせ、能力向上につながる仕組みが必要である。

参考文献

- (1) 経済産業省, ものづくり白書 2018 年版第 1 部第 1 章第 3 節 “価値創出に向けた Connected Industries の推進”, <https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/mono/2018/honbun/html/honbun/101031.html>
- (2) 総務省, 平成 28 年度 情報通信白書 第 1 部第 4 章第 4 節 “必要とされるスキルの変化と求められる教育・人材育成のあり方”, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/pdf/n4400000.pdf>
- (3) 経済産業省, “社会人基礎力”, <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>
- (4) ベネッセ総合教育研究所, “データで見る学生の実態と社会で求められる力のギャップ”, https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/021.pdf
- (5) 総務省, “ICT 利活用の促進”, http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/ictseisaku/ictriyou/index.html
- (6) 経済産業省, “「新産業構造ビジョン」一人ひとりの、世界の課題を解決する日本の未来”, https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/shinsangyo_kozo/pdf/017_05_00.pdf
- (7) 喜多一, “わが国の情報教育—初等教育から大学教育まで”, システム/制御/情報, Vol. 62, No. 7, pp.242-247, 2018.
- (8) 情報処理学会, “カリキュラム標準一般情報処理教育(GE)”, https://www.ipsj.or.jp/annai/committee/education/j07/ed_j17-GE.html
- (9) 佐藤雅希, 他, “作問学習における思考力・判断力・表現力の自己評価支援機能の開発と評価”, 教育システム情報学会第 43 回全国大会講演論文集, P1-06, 2018.
- (10) 森敏阿昭, 吉田寿夫編著, 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 第 5 章第 2 節 連関係数, 北大路書房, 1990.
- (11) 重田勝介, “反転授業 ICT による教育改革”, 情報管理 56(10), pp. 677-684, 2013.

付 録 最終振り返りアンケート

1. 授業の到達目標の達成度

「授業の到達目標」について該当するものに○をつけて下さい。
○目標 1 : 「地域社会が抱える問題を認識でき、その問題の本質を正しく理解できる。」

- ・この到達目標を意識して授業に取り組んでいましたか?(この目標を知らなかった, この目標を知っていたが意識していなかった, この目標を時々意識した, この目標を常に意識した)
- ・この到達目標に対するあなたの達成度はどれくらいですか?(まったく達成していない, あまり達成していない, やや達成し

た、十分に達成した)

・あなたの大学での学びや、社会に出てからの仕事において、この目標はどれだけ重要だと思いますか?(まったく重要でない、あまり重要でない、やや重要である、非常に重要である)

○目標2:「問題解決のための、人的・組織的ネットワークの必要性に気づくことができる。」

・この到達目標を意識して授業に取り組んでいましたか?(この目標を知らなかった、この目標を知っていたが意識していなかった、この目標を時々意識した、この目標を常に意識した)

・この到達目標に対するあなたの達成度はどれくらいですか?(まったく達成していない、あまり達成していない、やや達成した、十分に達成した)

・あなたの大学での学びや、社会に出てからの仕事において、この目標はどれだけ重要だと思いますか?(まったく重要でない、あまり重要でない、やや重要である、非常に重要である)

○目標3:「地域課題の解決に利活用できる情報技術・情報システムの基礎知識がある。」

・この到達目標を意識して授業に取り組んでいましたか?(この目標を知らなかった、この目標を知っていたが意識していなかった、この目標を時々意識した、この目標を常に意識した)

・この到達目標に対するあなたの達成度はどれくらいですか?(まったく達成していない、あまり達成していない、やや達成した、十分に達成した)

・あなたの大学での学びや、社会に出てからの仕事において、この目標はどれだけ重要だと思いますか?(まったく重要でない、あまり重要でない、やや重要である、非常に重要である)

○目標4:「共通した問題解決へ向けて、協働して取り組むことができる。」

・この到達目標を意識して授業に取り組んでいましたか?(この目標を知らなかった、この目標を知っていたが意識していなかった、この目標を時々意識した、この目標を常に意識した)

・この到達目標に対するあなたの達成度はどれくらいですか?(まったく達成していない、あまり達成していない、やや達成した、十分に達成した)

・あなたの大学での学びや、社会に出てからの仕事において、この目標はどれだけ重要だと思いますか?(まったく重要でない、あまり重要でない、やや重要である、非常に重要である)

2. 事例研究協働活動

前半で実施した「事例研究協働活動」について、該当するものに○をつけてください。

・事前に配布された資料の内容の要約や、関連事項の調査を行うという「予習」の取り組みについて(まったく真剣に取り組まなかった、あまり真剣に取り組まなかった、時々真剣に取り組んだ、いつも真剣に取り組んだ)

・二人一組で行った事例研究行動活動の取り組みについて(まったく真剣に取り組まなかった、あまり真剣に取り組まなかった、時々真剣に取り組んだ、いつも真剣に取り組んだ)

・前半の活動について何か意見があれば自由に記述して下さい。

3. 事業提案協働活動

後半で実施した「事業提案活動」について、該当するものに○をつけてください。

・事業提案活動の取り組みについて(まったく真剣に取り組まなかった、あまり真剣に取り組まなかった、時々真剣に取り組んだ、いつも真剣に取り組んだ)

・後半の活動について何か意見があれば自由に記述して下さい。

4. ふりかえりシートについて

・ふりかえりシートによる、活動内容の反省と翌週以降への活用について(まったく活用しなかった、反省したことを翌週以降の活動にあまり活かさなかった、反省したことを翌週以降の活動に時々活かした、反省したことを翌週以降の活動にいつも活かした)

・ふりかえりシートについて何か意見があれば自由に記述して下さい。

5. アクティブラーニング形式の授業について

・どの程度適応できましたか。(まったく適応できなかった、あまり適応できなかった、やや適応できた、十分に適応できた)

・アクティブラーニング形式の授業について何か意見があれば、自由に記述して下さい。

6. 社会人基礎力について

経済産業省が提唱している社会人基礎力それぞれに対し、この授業を受講する前後で成長したかを、(大きく後退した、少し後退した、変わらない、少し成長した、大きく成長した)の5段階で自己評価して下さい。

○前に踏み出す力

・主体性 ・働きかけ力 ・実行力

○考え抜く力

・課題発見力 ・計画力 ・創造力

○チームで働く力

・発信力 ・傾聴力 ・柔軟性 ・状況把握力 ・規律性

・ストレスコントロール力